

## 『日本の学生野球の今昔』

(2003年12月2日, 学習院大学経済学部講演要旨)

日本高等学校野球連盟会長

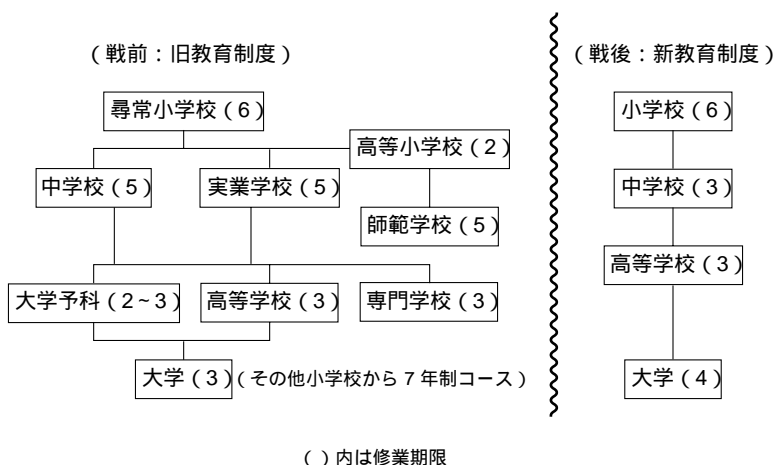
脇村 春夫

### はじめに

#### 【1】学生野球の範囲

今日、お話する学生野球の範囲は戦前は中等学校野球・旧制高等学校専門学校野球・大学野球、戦後は高等学校野球・大学野球ですが、中心は戦前の中等学校野球と戦後の高等学校野球です。しかし、若干大学野球の戦前、戦後の変化にも触れます。またここ、学習院のキャンパスは東京都内ですから東京都の高校(中等)野球と学習院の野球にも言及いたします。

戦前と戦後の教育制度の違いは以下のとおりです。

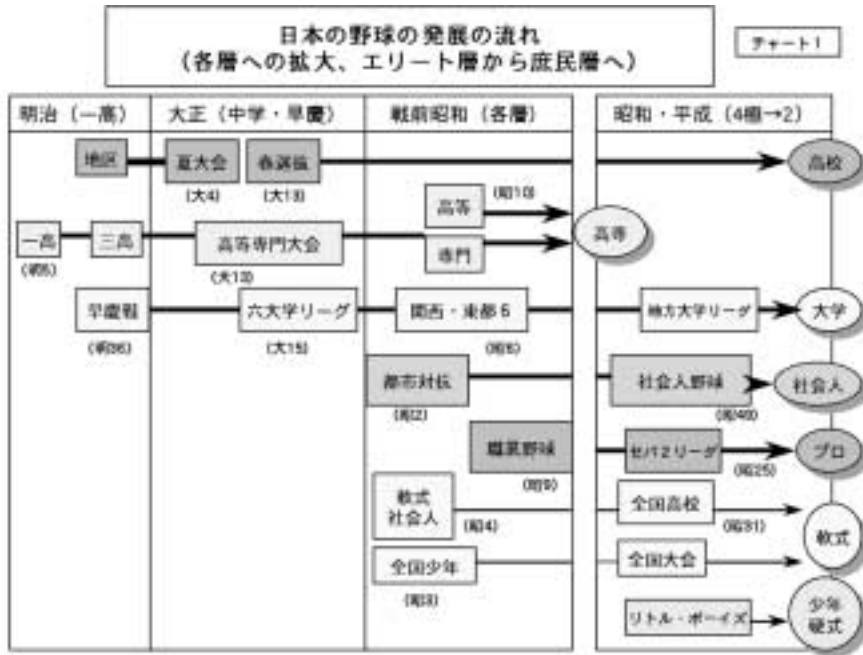


学習院の戦前は中学校・高校の7年制一貫コースでした。

#### 【2】日本の野球の発展の流れ

日本の野球全体の明治から今日迄の流れをチャート1で示しました。一番最初に始まったのが一高の前身である第一番中学校で明治5年に米人教師の Horace Willson (昨年野球殿堂入り) でした。そこから明治末から大正にかけて高等専門学校, 六大学, 中等学校に普及して行く姿がお分かりでしょう。日本ではアメリカとは異なり高校, 大学, 中学校のエリート層から一般

庶民層に広がって行くのが特徴です。



## 第一章 高校(中等)野球の今昔

### 【1】高校(中等)野球の昭和10年と平成14年の比較

表1をご覧ください。昭和10年頃は戦前における学生野球が最も盛んな時期と言われていいますが、それでも参加校数は665校と野球部普及率は39%です。現在(平成14年)は4,219校、普及率75%と遙かに野球の裾野が広がっています。

昔も今も変わらないのが野球を教育の一環、人格の形成の場とする精神野球で、この精神野球は現在の高校野球指導者の野球教育のバックボーンになっています。明治時代の一高から始まった精神野球が、そのご早稲田の初代監督の飛田穂洲によって各地に広められ、それが現在まで継承されていることで高校野球は発展してきたとも言えましょう。

表1 日本の高校(旧制中学)野球の今昔

比較項目	昔(昭和10年1935)	今(平成14年2002)	備考
社会・経済一般			
・経済	発展	不況	繊維輸出躍進
・人口(千人)	69,000	127,000	2倍弱に増加
・一人当GNP	260千円(現在価値)	3,000千円	貧乏国 富裕国
・産業構造			昔: 農業国
一次/二次/三次	55%/17%/28%	16%/20%/64%	今: 三次産業
・メディア	新聞・ラジオ	新聞・テレビ・ラジオ・IT	メディアの発達

## 『日本の学生野球の今昔』(脇村)

学校進学 ・小学 ・旧中・実(高校) ・旧中高進学率 ・大学校 ・大学進学率	11,035千人 1,698校677千人(私21%) 25% 45校・71千人 20%	7,297千人 5,499校・4,061千人(24%) 98% 669校・2,765千人(私74%) 60%	小子化 私立%変化なし 高校進学率 98% 大学進学率 60% 女子進学率
生徒体格 中学3年男 野球の人気 ・野球発展の流 ・硬式野球場数 ・参加校数(硬) ・野球部員数 ・野球部普及率 ・生徒年齢層 ・軟式野球階層 ・甲子園出場校 ・私立出場校率 ・プレーの特徴 ・大会記録平均 ・グローブ ・バット・設備 ・優勝校出身県	身長151cm・体重41kg 中学・六大学・社会人3分 上(特権・中流) 下軟式 130(含む大学, 高専) 665校 16,600人(25人) 39% 12~17才(中学1~5年) 小学校 春20/夏21校 約30% 守り中心型, 当てる打撃 本塁打0/失策3/安打6.7 1種類小さいSplit-finger 木製900gr(240g)	165.5cm・55.5kg 高校・プロ2分 国民大衆のスプーツへ 約1,000(推定) 4,219校 151,000人(36人) 75% 15~18才(高校1~3年) 小学校・中学校・高校 春32校/夏49校 約70% 攻撃型, Power Swing 本0.5/失1/安9(夏大会) 3種類大きいTied-finger 金属製950gr・ナイター, マシン	体格 昔: 昭和30年 六大学・社会人 すべての層へ 現在地区大会240 6倍増, 地方予選 昔1チーム25名推定 今女子校含む 今年齡1才伸びる 硬式: リトル・ボーイズ 夏は2倍贈 今私立校の躍進 野球が面白くなる 昔守備, 攻撃共劣 牧野前会長グローブ 握りが太く, 重たく 戦前, 戦後の比較
・優秀選手進路 ・甲子園のファン ・野球と教育 ・規制 ・学校の牽引車 監督の職業 監督の出身校	特定校, 特定県集中 東低西高(慶, 松商) 中学 六大学 都市対 男性, サラリーマン, 店員 精神野球 野球統制令(昭和7) 校長・部長 外部に仕事を持つ 母校(コーチ)	各県分散(除く4地区) 神奈川千葉大阪九州 高校 プロ 一般大衆, 老若男女 人間づくり, 教育の場 佐伯通達・自由枠・監督 監督(教員が大半) 大半が教員(内部) 伝統校: 母校出身 新鋭校: OBに非ず 高野連, 新聞社共催 今日迄続いている所 あり	6大学社会人不人気 ファン層の広がり レベルの格差勝利主義 近年のプロアマ問題 戦前は校長の熱意 昔: 毎日来れず 6大学のコーチ
甲子園主催者 地方での定期戦 (中学対商業) 選手の父兄応援 軟式野球部 硬式野球の一貫 選手の県外採用 選手の特別入学 野球部不祥事件	新聞社(朝日, 毎日) 非常に盛ん(早慶戦) 殆どなし(消極的) なし(軟式は小学生) 中学(7年制), 高校 (予科)大学相互試合 ごくまれ 殆どなし 学校の自主判断 (厳しくない)	保護者会として熱心 軟式あり(530校) ボーイズ, リトル, 高校 大学相互試合なし 私立は頻繁 推薦入学, スポーツ科 個人学校, 部高野連 (厳しい)	戦後高野連誕生 レベルの格差拡大 特に母親の応援 両部併存, 片方 中学, 高校遮断 国内留学 公立, 私立の格差 学生野球憲章
文武両道 サッカー人気グラウンド	文武両道可能 人気なし, 専用グラウンド	文武両道不可 サッカーに押される共有	文武両道は軟式 ピッチングマシン威力

## 【2】戦後における甲子園出場校, 優勝校, 優勝県, 学校の種別の変化

昭和24年と現在の参加校数, 甲子園出場校数, ベンチ入選手数を比較しますと, 昭和24年はそれぞれ1,365校, 23校, 14名に対して平成15年は, 4,223校, 49校, 18名と大きく増加しています。

春・夏の甲子園全国大会の優勝校は昭和20年代は圧倒的に公立校が多かったのが平成年代では殆どが私立校に変わりました(表2参照)。私立校の甲子園出場率が最近では約70%と

公立校よりも遙かに多いわけですからこれは当然の結果と言わねばなりません。公立校の中でも商業学校、工業学校の出場機会が減少しているには、日本の産業構造の変化と無関係ではありません。

戦前と戦後の優勝県の変化を見ますと戦前は愛知（優勝回数 10 回）、兵庫（6）、広島（6）、和歌山（5）、岐阜（4）の 4 県に集中して東低西高の傾向だったのが、戦後は岐阜以外の上記 3 県以外に愛媛（6）、大阪（16）、東京（9）の戦前の優勝経験県と戦後に初めて優勝した神奈川（10）、徳島（6）、高知（5）以下の多数の県に分散されてきたのが大きな違いです。

表 2-1 戦後の甲子園全国大会（春・夏）における公立（県立・市立）校の優勝校リスト

年 度	夏		春		年 度	夏		春	
	学校名	県	学校名	県		学校名	県	学校名	県
昭和21					昭和50	習志野	千葉		
22	小倉中	福岡	徳島商	徳島	51				
23	小倉高	福岡	京都一商	京都	52			箕島	和歌山
24	湘南	神奈川	北野	大阪	53			浜松商	静岡
25	松山東(商)	愛媛	斐山	静岡	54			箕島	和歌山
26			鳴門	徳島	55			高知商	高知
27	芦屋	兵庫	静岡商	静岡	56				
28	松山商	愛媛	洲本	兵庫	57	池田	徳島		
29			飯田長姫	長野	58			池田	徳島
30	四日市	三重			59	取手二	茨城		
31					60			伊野商	高知
32	広島商	広島			61			池田	徳島
33	柳井	山口	済々巒	熊本	62				
34	西条	愛媛			63	広島商	広島	宇和島東	愛媛
35			高松商	香川	平成 1				
36					2				
37					3				
38			下関商	山口	4				
39			徳島海南	徳島	5				
40	三池工	福岡	岡山東	岡山	6	佐賀商	佐賀		
41					7			観音寺中央	愛媛
42	習志野	千葉	津久見	大分	8	松山商	愛媛		
43			大宮工	埼玉	9				
44	松山商	愛媛			10				
45			箕島	和歌山	11				
46					12				
47	津久見	大分			13				
48	広島商	広島							
49	銚子商	千葉							

（公立校優勝比率）

昭和21～39年：夏53%，春66%      昭和40～63年：夏42%，春50%  
平成1～12年：夏17%，春8%      通期：夏40%，春44%

表 2-2 戦後の甲子園全国大会（春・夏）における私立校の優勝校リスト

年 度	夏		春		年 度	夏		春	
	学校名	県	学校名	県		学校名	県	学校名	県
昭和21	浪 商	大阪			昭和50			高 知	高知
22					51	桜 美 林	東 京		
23					52	東 洋 姫 路	兵 庫		
24					53	P L 学 園	大 阪		
25					54	箕 島	和歌山		
26	平 安	京 都			55	横 浜	神奈川		
27					56	報徳学園	兵 庫	P L 学 園	大 阪
28					57			P L 学 園	大 阪
29	中 京 商	愛 知			58	P L 学 園	大 阪		
30			浪 商	大 阪	59			岩 倉	東 京
31	平 安	京 都	中 京 商	愛 知	60	P L 学 園	大 阪		
32			早 稲 田 実	東 京	61	天 理	奈 良		
33					62	P L 学 園	大 阪	P L 学 園	大 阪
34			中 京 商	愛 知	63				
35	法 政 二	神奈川			平成 1	帝 京	東 京	東 邦	愛 知
36	浪 商	大 阪	法 政 二	東 京	2	天 理	奈 良	近 大 付	大 阪
37	作新学院	栃 木	作新学院	栃 木	3	大 阪 桐 蔭	大 阪	広 陵	広 島
38	明 星	大 阪			4	西 日 本 短	福 岡	帝 京	東 京
39	高 知	高 知			5	育 英	兵 庫	上 宮	大 阪
40					6			智 弁 和 歌 山	和 歌 山
41	中 京 商	愛 知	中 京 商	愛 知	7	帝 京	東 京		
42					8			鹿 児 島 実	鹿 児 島
43	興 国	大 阪			9	智 弁 和 歌 山	和 歌 山	天 理	奈 良
44			三 重	三 重	10	横 浜	神奈川	横 浜	神奈川
45	東 海 相 模	神奈川			11	桐 生 第 一	群 馬	沖 縄 尚 学	沖 縄
46	桐 蔭	神奈川	日 大 三	東 京	12	智 弁 和 歌 山	和 歌 山	東 海 相 模	神奈川
47			日 大 桜 丘	東 京	13	日 大 三	東 京	常 総 学 院	茨 城
48			横 浜	神奈川	14	明 徳 義 塾	高 知	報 徳 学 園	兵 庫
49			報 徳 学 園	兵 庫	15	常 総 学 院	茨 城	広 陵	広 島

(私立校優勝比率)

昭和21～39年：夏47%，春34% 昭和40～63年：夏58%，春50%

平成1～12年：夏83%，春92% 通期：夏60%，春56%

## 【3】東京都の高校（中等）野球の今昔

明治20年代の一高の野球に刺激されて、明治30年代には郁文館中、正則中、青山学院、明治学院、独逸協会、慶應普通部、高等師範付属中、学習院等が野球を始めます。明治の末、一高の力が衰え始めた頃には郁文館中が一高との練習試合に勝利をおさめています。

戦前の大正、昭和期での春夏甲子園出場校は早稲田実業、慶應普通部、慶應商工、日大三高の大学系列のみでした。しかも、その中で全国優勝したのは慶應普通部1回（夏、第2回大会、大正5年）のみで、東京勢は弱かったです。

戦後における東京の初優勝は春は昭和32年の早稲田実業、このとき王投手が活躍します。夏は昭和51年の桜美林です。その後は春は日大三（昭和46年）、日大桜ヶ丘（47年）、岩倉（59年）、帝京（平成4年）。夏は帝京（平成元年、7年）、日大三（平成13年）と東京勢が頑張ります。

東京都の参加校数は昭和10年の47校から昭和30年には130校となり、更に平成15年には、

その倍の 263 校と膨れ上がります。昭和 49 年夏からは東西にわかれて地区予選を行い、夏の甲子園出場校は 2 チームとなりました。

公立校の甲子園出場は夏のみで、いままで 4 回です。即ち高等師範付属中（昭和 21 年）、国立（55 年）、城東（平成 11 年）、雪ヶ谷（15 年）です。しかし、戦績は芳しくなく、付属中が準々決勝で浪商（平古場投手）に敗退した以外は、すべて 1 回戦で敗れています。

最近の東京勢は元気がありません。甲子園での初戦敗退が続いています。春の選抜には今までは 2 校が選ばれていましたが、今年の春は 1 校に削られてしまいました。今秋の神宮大会では代表校の二松学舎が 2 回戦で大敗しています。

#### 【4】学習院の野球の戦前、戦後の展開

明治 22 年に野球部（中等科、高等科）が同好会として創部されました。明治 26 年には正則中学、明治 29 年には高等師範学校付属中学と試合をしています。

付属中学とは大正 3 年より定期戦となり、現在迄続く両校としても重要行事の一つです。夏の大会の東京予選は昭和 6 年より参加しています。早くから野球を始めたのに何故、予選参加がかくも遅かったのか不思議でなりません。学校当局側が野球に熱心でなかったからかも知れません。乃木院長の野球嫌いは有名な話で、明治 44 年に新聞を賑わした野球害毒論に賛成しているほどです。

戦績の方はどうだったでしょうか。戦前の中等科は夏の東京都の予選では 3 回戦まで勝ち進んでいました。戦後の高等科の方も 3 回戦までと健闘していましたが、最近では 2 回戦どまりです。何故弱くなったのでしょうか。その原因は

勉強優先のため、十分な練習が出来ない、部員数も少ない。

他の私立校のごとく推薦入学制度はない。従って中学校の優秀な野球選手の勧誘が出来ない。

中等科の野球部選手がそのまま高等科の野球部に入らず、他校に移る。

専任監督ではない。監督は自分の仕事の片手間、毎日の練習にはこられない。などが考えられます。

## 第二章 大学野球の今昔

### 【1】戦前の旧制大学野球

明治期には一高の野球に刺激されて慶應（明治 26 年）、早稲田（明治 34 年）に野球部が誕生します。早稲田が最初に試合をしたのが学習院（高等部）でした。明治 36 年から開始された早慶戦は人気がありました。それが遂には両校による応援団の乱闘事件にまで発展して、明治 39 年には中止になります。早慶戦が再開されたのは、なんと 20 年後の大正 14 年でした。いかに因縁の対抗戦であったかがわかります。

戦前の大学の野球のリーグ戦は東京 6 大学リーグ、東都大学リーグ、関西 6 大学リーグ（現在の名称は関西学生野球リーグ）の 3 リーグしかありませんでした。東京 6 大学リーグは大正 15 年から新装なった神宮球場で開始、参加校は慶應、早稲田、明治、法政、立教、東大。東都大学リーグは昭和 6 年にスタート、専修、中央、日本、國學院、東京農大の 5 校です。関西 6 大学リーグは、同じく昭和 6 年に開始され参加校は立命、関西、関学、京都、神戸商大（現

在の神戸大)、同志社でした。東都、関西の両リーグの参加校の中では現在では全く姿を消している東京農大と神戸商大が入っているのを見逃すわけには行きません。

旧制7帝国大学(北海道、東北、東京、九州、京城、台北、大阪)の全国大会はありませんでした。4帝大(東北、東京、京都、九州)野球優勝大会が昭和3年に1回、甲子園で開催されている程度です。その代わり東大対京大、九大対京城大の定期戦がありました。

## 【2】戦後の新制大学の野球

戦後は新教育制度のより大学の数が一気に増加します。それは戦前の官立の帝国大学、私立大学のほかに戦前の旧制高校、専門学校(高等商業、高等工業、高等農林、薬学、医学)及び師範学校が大学に昇格したこと、新設の私立の大学が新たに誕生したことによるものです。かくして戦前は大学は大都市にしかありませんでしたが、戦後は地方の主要都市に生まれたのです。

戦前は旧制高校と専門学校でも野球が盛んで全国大会が開催されていたくらいですから、それらを受け継いだ戦後の新制大学でも野球部が誕生します。学習院大学の野球もしかりです。ちなみに戦前と現在を比較しますと、戦前の大学野球の連盟数は上記で述べたように3連盟、加盟校は17校でしたが、それが現在では26連盟、加盟校数358校にまで膨れ上がっています。

戦前と戦後の大きな違いは、一つは東京6大学、旧関西6大学は戦前と同様入替戦はありませんが、東都は入替戦がある点です。東大と京都はこの為安泰ですが、学習院は入替戦がある為に一部から脱落してしまいました。二つ目は地方の大学の力が向上した結果、大学選手権大会、神宮大会で東京6大学チームが優勝出来なくなりました。その理由は高校野球の優秀な選手が東京6大学に行かずに、地方の大学でプレーするようになったからです。東京6大学野球に昔ほどの魅力がなくなってしまったのです。それは何故でしょうか。

## 【3】東京6大学野球の人気低落の原因

それは以下五つの原因が考えられます。

校舎の郊外移転により、神宮に応援に行くのにも時間がかかるようになった。

学校当局が野球の応援だけを特別扱いにして、応援に行く学生を支援することをやめてしまった。

試合自体が面白くなくなった。

スター選手の不在。高校野球のスター選手がプロに行ってしまう。

その結果、若い女性ファンが神宮に来なくなった。

## 第三章 学習院の大学(旧制高等部)野球の今昔

### 【1】戦前の旧制高等部の野球

学習院は明治期は一高との定期戦或いは早稲田との練習試合を行うなど野球は盛んでした。大正・昭和期では全国高等専門学校野球大会でも活躍します。大正13年から始まった全国高等専門学校野球大会は昭和10年からは高等学校と専門学校とが別々に開催されるようになり、高等学校の方はインターハイの名称で昭和10年から戦争による中止時期(昭和18年~20年)

を挟んで昭和 23 年迄続きますが学習院は昭和 21 年には見事全国優勝を成し遂げます。それは戦争中でも野球の練習を続けた成果でしょう。

## 【2】戦後の新制大学の野球

戦後、学習院は東都 6 大学野球リーグの 2 部に所属して昭和 26 年春秋、27 年春優勝します。入替戦で勝って 1 部に昇格し、27 年秋より 35 年春まで 1 部で健闘します。この時期が学習院の黄金時代でした。草刈投手（昭和 31 年卒）、島津監督が活躍した時代です。特に昭和 33 年秋のリーグ戦では初優勝を遂げました。この優勝戦には皇太子（今の天皇）も熱心に応援されました。

以後は 2 部と 3 部を行ったり来たりでしたが、近年は最下位の 4 部に甘んじるようになってしまいました。今後の復活を願ってやみません。

## さいごに（学生野球の将来）

さいごに学生野球の将来にふれて講演を終わりたいと思います。

大学野球については東京六大学野球の人気を何としてでも回復させねばなりません。その為には何をなすべきかを六大学野球連盟としてプロジェクトチームを作って検討すべきでしょう。

高校野球については以下の課題があります。

少子化による部員不足（特に過疎地）に悩むチームをどのように救うか。現在も認めています連合チームの練習試合を公式試合まで拡げるかどうかです。

野球留学（県外選手の入部）の為に高校野球文化である地域との密着性と郷土色が希薄になる矛盾をどのように解決すべきかです。

プロアマの交流問題：現在の野球憲章で禁止されている高校野球選手に対する現役プロ或いは元プロ選手の一時的指導の道をどのようにして切り開いて行くかです。

現在はマネージャーにしか認めていない女性部員を選手として認めるかどうかです。

高校野球の今後の発展の為には以上の課題を解決して行かねばなりません。